

よもつひらさか  
黄泉平坂

むかし、まだこの世に人間がいなかったころのことです。神さまたちは、高天原たかまがはらとよばれる天にいました。あるとき、男神おとこがみのイザナキと女神おんながみのイザナミがたくさんの島々を作りました。これを国生くにうみといいます。国ができあがると、イザナキとイザナミは、たくさんの神々を作りはじめました。風の神、木の神、山の神などです。そして、火の神を生んだとき、イザナミは病気になり、やがてなくなってしまいました。イザナキは泣き悲しみ、その涙から泉の神が生まれました。

残されたイザナキは、なんとかしてイザナミに会いたいと思いました。そこで、死者の国である黄泉よみの国へ出かけていきました。

黄泉の国はまつくら闇の世界でした。イザナキが死者の御殿まで来てとびらをたたくと、暗闇の中にイザナミが現れました。イザナキは、

「愛しい妻よ。あなたといっしょに作った国は、まだ作り終えてはいない。さあ、帰ろう」といいました。すると、イザナミは答えました。

「来るのが遅すぎました。わたしはこの国の食べ物食べてしまったのです。でも、なんとかしてあなたのもとに帰りたい。黄泉の神さまと話しあうことにします。そのあいだここで待っていてください。そして、決して私のすがたを見ないでください」

そして、御殿のおくへ入ってしまいました。

長いこと待ちましたが、イザナミはなかなか出てきません。イザナキは待ちきれなくなって、髪にさしていた櫛の齒を一本ぼきりと折って、火をつけました。そのともしびをかざして、とびらを開け、御殿の中に入っていったのです。

ともしびに浮かびあがったイザナミの体は、腐って横たわり、数えきれないほどのウジ虫がうごめいていました。そして、八つの雷神らいじんが、イザナキの頭にも胸にも腹にも、股にも両手両足にもとりついていました。

イザナキは恐ろしくて、逃げだしました。

イザナミはただだれてゆがんだ顔をイザナキに向けていいました。

「あなたは、わたしに恥をかかせましたね」

そして、ヨモツシコメという恐ろしい女たちに命じて、イザナキのあとを追わせました。

イザナキは、逃げながら、冠にしてかぶっていたつる草を後ろに投げました。すると、山ぶどうが生えてきて、ヨモツシコメたちがそのぶどうをとって食べているあいだに、イザナキはどんどん逃げました。けれども、また追いついてきたので、こんどは髪から櫛をぬき、くしの歯を折り取ってうしろに投げました。すると、こんどは竹の子が生えてきました。そして、ヨモツシコメたちが竹の子を食べているあいだに、また逃げました。

ところが、こんどは雷神たちが、黄泉の国の軍勢を引き連れて追いかけてきたのです。イザナキはつるぎを抜いて、うしろ手に振り回しながら逃げました。ようやく地上との境の黄泉平坂よもつひらさかまでくると、イザナキは、そこに生えていた桃の実を三つとって、雷神たちに投げつけました。すると、雷神たちは、軍勢もろともあわてて逃げもどっていきました。イザナキは、桃の実にむかっていたいました。

「おお、桃の実よ。わたしを助けてくれたように、これからは、人間たちが病で苦しんでいるとき、どうか助けてやってくれ」

そうしているうちに、こんどは、イザナミがみずから追いかけてきたのです。そこで、イザナキは、千人がかりでなければ動かせないほどの大きな岩を、黄泉平坂のまんなかひきすえて道をふさぎました。イザナキとイザナミは、その岩のこちらとあちらに向かい合って立ちました。イザナミは、怒りにふるえながらいいました。

「いとしいあなた。あなたがこれほどひどい仕打ちをなさるなら、わたしは、あなたの国の人間を、一日に千人、くびり殺してしましましょう」

すると、イザナキは答えました。

「いとしい妻よ。もしおまえが一日に千人殺すというのなら、わたしは、一日に千五百人の赤ん坊が生まれるようにしよう」

こうして、イザナキが治める葦原あしはらの中つ国では、一日に必ず千人が死に、千五百人が生まれることになったのです。